# 緑の芽

佐左木俊郎

# 一

弾力に富んだ春の活動は、いたるところに始まっていた。

太陽は燦爛(さんらん)と、野良(のら)の人々を、草木を、鳥獣を、すべてのものを祝福しているように、毎日やわらかに照り輝いた。農夫は、朝早くから飛び起きて、長い間の冬眠時代を、償おうとするかのように働いていた。

菊枝はまだ床の中で安らかな夢に守られているらしかった。父親は、朝飯前にと、近所へ出掛けたきり、陽(ひ)は既に高く輝いているのにまだ戻らなかった。祖父

は炉端（ろばた）で、向こう脛（ずね）を真赤（まっか）にして榾火（ほだび）をつつきながら、何かしきりに、夜更（ふ）かし勝ちな菊枝のことをぶつぶつ言ったり、自分達の若かった時代の青年男女のことを呟（つぶや）いていた。そして時々思い出したように、どうしても我慢がならねえ……と言うように、菊枝の眠っている部屋の方へ、太いどら声で呼びかけた。

「菊枝！　菊枝！　もう、午（ひる）になってはあ！　もう、てえげに起きだらいかべちゃは。」

　こう祖父は、幾度となく呼び起こした。けれども、彼女は、すやすやと眠っているらしく、なんとも答えなかった。

彼女が自分自身の時間を惜しむ近頃の癖（くせ）から、もう一つは口やかましい祖父に対する反感から、眠り果てぬ眠りを装（よそ）うているのだということは、祖母も母も感付いていた。が、母は、彼女の真実の母でないという遠慮から、彼女を起こしに行くだけの大胆さはなかった。祖母はまた、軒の下や庭に散らばっている塵を掃き蒐（あつ）めながら、揺り起こしに行こうか、いま揺り起こしに行こうかと思いながらも、また一方では、自分の娘以上に手をかけて育てた子供だけに、ただの一分間でも余計にじっと寝かして置きたいような気がした。

「本当に、今時の娘達は気儘（きまま）なもんだ。」

祖父はとうとう独り言を始めた。

「夜は夜で、夜業(よなべ)もしねで、教員の試験を受けっとかなんとかぬかして、この夜短かい時に、いつまでも起きてがって、朝は、太陽(おてんとさま)が小午(たぼこ)になっても寝くさってがる。身上(しんしょう)だって財産(かまど)だって、潰(つぶ)れてしまうのあたりめえだ……」

彼女の継母(ままはは)は、祖父のこの呟(つぶや)きを、快く聞き流しながら、背中に小さな子供を不格好に背負い込んで囲炉裏(いろり)で沢山の握り飯を焼いていた。

祖母は戸外から這入(はい)ってきて、あまりにも口やかましい祖父に、不機嫌な視線を投げかけた。併し、祖父

はそれどころではなかった。もう既に焼き飯も焼けているのに、菊枝が起きてこないと言うだけのことで、魚を漁(と)りに行く時間が遅くなるのに、まだ朝飯にならないのだから。子供達も、学校の時間に急(せ)きたてられながら、飯になるのばかりを待っていた。

「学校さ行く小児(こども)も、やきもきしていんのに……」

祖父は最後にこう呟いて、真赤にやけた向こう脛(ずね)を一撫(ひとな)でして腰を伸ばした。そして、菊枝を蹴起こしてやるというような意気込みで、彼女の寝ている部屋に這入って行った。

# 二

みんなが食卓のまわりを襤褸束(ぼろたば)を並べたように取り巻いて、いざ食事にかかろうとしているところへ、彼女の父親が他所(よそ)から帰ってきた。みんなは彼を眼で食卓の傍(そば)へ招いた。

父親は近所での見聞を、断片的にものがたりながら食卓に就いたが、食事にとりかかってその種(たね)を失った。祖父は重い口調で命令的に訴えた。

「松三。少し菊枝さ、言ってきかせて置がせえちゃ。俺言ったて、馬の耳さ念仏だから……」

祖父はこう切り出して松三の顔を見、菊枝の表情（かおいろ）に見入り……。

菊枝の頬はほんのりと紅がさして、自然に項垂（うなだ）れてしまった。そして彼女は、まるで飯粒を数えるように、飯粒の上に、箸の上に、小さな動作を繰り返した。

「まだ初稼ぎだで、山仕事で疲れてんのがと思えば……」

祖父は容赦（ようしゃ）なく続けた。

「この忙し時、朝っぱらから、寝床の中で、書物を見てがるんだから……本当に呆（あき）れだもんだ。」

松三は、けれども何も言わなかった。——そんなこ

と、別に腹立てる程のことでもあるまい——そんな表情で飯をかき込んだ。菊枝は、全く済まないことをしたと言うように、そのまま消えてもしまいたいと言うように、ほんのり、顔を赤らめて、息を殺して碗（わん）に盛った飯をもてあましていた。

「こんなことは、俺が言わなくたって……松三はなんと思うか知らねえが。俺は、百姓の娘（こ）がこんなごっては……」

祖母が横から、祖父の顔を睨（にら）むようにして、そして祖父の言葉尻を捉えるように言った。

「そんなこと言ったって、爺（じん）つあまや。何しろまだ十

六だもの……裁縫習(てどなれ)えにもやんねえのだもの、考(かんげ)えで見ればこのわらしも……」

祖母はまず自分自身の哀れなオールライフを涙含(ぐ)ましく思った。

「考(かんげ)えで見れば、可哀想ださ。ほんでも、朝っぱらから、寝床の中で、書物を読んでるなんて、百姓の娘が……」

「学校の先生様になんのだぢゅうもの、何、いがすぺちゃ」と、黙り続けていた継母が突然口を入れた。

松三は食事の間、一言も口をきかなかった。食事が済むと、しかし悠長に煙管(きせる)をくわえて、何事をおいて

も、この事を解決してしまわねばならないというような表情で、けれども、全く落ち着き払った態度で……。

「菊枝！　台所が済んだら、ちょっとここさ来(こ)うまず。」

　菊枝は台所からおどおどしながら出てきて、窮屈な雪袴(ゆきばかま)の膝を板の間に折った。

　父親は、掌(てのひら)でぽんぽんと煙草の吸い殻を落として、眤(じ)っと、項垂(うなだ)れた菊枝の顔を凝視(みつ)めた。

「菊枝！　貴様は、年も行かねえのに、いろいろど気がついて働いでくれで、仲々感心な奴だと思っていだら、もっての外の考えをもっていんなや？」

菊枝は、黙々として項垂(うなだ)れ続けた。祖父は幾分後悔の気持ちで刻(きざ)み煙草を燻(くゆ)らし続けていたし、祖母はかばってやらねばならぬ折を、おどおどしながら待っていた。

「今までは本当に、全く感心な奴だと思っていたのに……今からは、そんなごってはなんねだでや。この通り、俺家(おらえ)ど言うもの、稼ぐ者ってば、俺とお前ばかりだべ。母(がが)は母で病身だし、他(ほか)は、年寄りわらしばんだ。――そして、貴様になど、どんなことあったって、受かりこなどねえんだ。毎日それにばり一年もぶっ続け勉強した、かしゅくさんせえ、落第したんだもの。」

「百姓の子は……」祖父が突然口を入れた。「みっしり百姓のごとを習って、いいどこさ嫁に行けば、それでいいんだ。学(がく)で飯を食うべと思わねえで……」

「そんな、柄(がら)であんめえちゃ。」

継母は台所の方から出てきて、罵(ののし)りを含んだ微笑に口を歪(ゆが)めながら言った。

菊枝はその言葉がぎくりと胸にこたえた。が、彼女はちらりと睨むような視線を走らせたきり、尚も項垂れて黙り続けた。

「ようく聞いて置いてでな、菊枝！　今おめえに稼ぎを休まれたら、父(ちゃん)が一人で、どうもこうもなんねえんだ

から……」

こう言う祖母の表情は、ことにその眼は、菊枝の心に温かな、しかも涙ぐましい影を落とした。

「そんでもこんでも、試験を受げて見っと言うのなら仕方がねえげっとも、ほんどき、旅費も何も自分で心配しんだでや。俺は、不賛成なごどには金ば出さねえがら……」

父はこう言って煙管を敲いた。

「そんなごと無えんだから、早く稼ぎさ行ぐ支度をしてはあ……」

祖母は傍らから、庇護うように言った。

菊枝は渋々と立ち上がって、だが、すぐに山ゆきの支度にかかった。

## 三

菊枝はすっかり沈んでしまって、細い山路をのぼる時から、父親の踵（かかと）のあたりに視線を下ろしたきり、全く黙り続けていた。松三は、どうかしてこの不快な沈黙を破りたいと、しきりにその緒（いとぐち）を考えたり四辺（あたり）を見廻したりしていた。

草の芽はゴム細工のような、さもなければセルロイ

ド細工のような新芽を土の中から擡(もた)げていた。エボナイトのような弾力と光沢を持った、あらゆる樹木の梢(こずえ)に群がる木の芽は、ずんずんと日毎(ごと)にふくらんで行き、いろいろの小鳥は思い思いの音色で木の枝に囀(さえず)り廻っていた。けれども、何ら沈黙を破るべき機会を与えられなかった。

その沈黙！　しかも、もの哀れな、涙ぐましい沈黙は正午になっても続いていた。松三は、母親の無い自分の子、この力無い表情を視続けることに堪えられなく思った。

「菊枝！」と、松三は突然、思い出したように彼女を

呼んだ。

　その時、彼等父娘（おやこ）はちらちらと崩れかかる榾火（ほだび）を取り巻いて、食後の憩（いこ）いを息ずいていたのであったが、菊枝は野を吹く微風に嬲（なぶ）られて、ゆれる絹糸の縺（もつ）れのような煙を凝視（みつ）めて、悩ましい空想に追い縋（すが）るという様子であった。が、彼女は、父親から呼びかけられて初めて僅かに顔をあげた。

「おめえな、菊枝……」と、父親は重苦しい口調でこれだけ言って、深く煙草の煙を吸い込んだ。

「え」と菊枝は、声に出しては言わなかったけれども、そんな風な表情で、人なつこい眼を父の方に向けた。

「おめぇ、本当(ふんと)に試験を受げんのだごったら、みっしり勉強しなげえなんねえんだ。」
「ほだげっとも……」
菊枝は、父親のあまりに当て外れたこの言葉に、なんと答えていいのか解(わか)らなかった。
「汝(にし)あ、家にいでは、とっても勉強なんか出来ねえんだから、山さ来て勉強しろ。山さ書物持って来て……汝あ伐る分ぐれぇ、父(ちゃん)が伐っから、汝あな一生懸命に勉強しろ。」
父親のこの言葉は、菊枝に取って涙含ましかった。それは、あまりに温かい、涙含ましい言葉であった。

「ほだげっとも……ほだげっとも……」
「何、構うごとねえ。家の人達はあの通りみんな不賛成だげっと、俺だけは、汝を百姓にしたぐねえと思って……」
「爺様や継母さんは、（家のごどは考えねで、自分ばり楽するごと考えでる）って言うげっとも、俺は稼いだって大したごとも出来ねえから、何が外のごって……」
「そんなごど……汝あも仲々難儀だ。汝あの実母も、百姓などしねえげ、まだまだ死ぬのでなかったべ……」
彼は、若くして死んだ愛妻の死の前後を、その哀し

むべき半生を心の中で思い描いた。――それは菊枝を生んで間もなく、当然床の中に臥していなければならないうちに、ちょうどそれが田植えの時期だったので、無理に田圃へ出たのがもとで、産褥熱が昂じ、ひどい出血の後に、忙しい時期にお産をしたことを気にもみながら、夢見心地のうちに死んで行ったのであった。

「俺、月給取るようになったら、毎月なんぼかずつでも家さ送って寄越しべと思って……」

それは菊枝の真情であった。彼女は、同級の誰彼が、みんないろいろの方面へ進んで行って、自分一人が野良に残されたことを悲しく思いはしたが、決して父親

の苦しい生活を忘れてはいなかった。自分自身を救うと同時に父親をも、いやそれよりも自分を捨てて父親を助けねばならない……そういう気持ちから受験を思い立ったのであった。

「そんなことは心配しねえでも、まあ、みっしり勉強して……試験を受げさ行ぐ時の旅費ぐらい、父（ちゃん）がなんとかしっから、こっそり行って受げて来い。」

「俺、父（ちゃん）と二人ばりだら、試験なんか受げさ行かねげっとも……」

菊枝の両の眼には、いつの間にか熱い涙が湧いていた。

「父（ちゃん）は、汝（にし）を百姓にしたぐはねえと思って……貧乏さえしてねげ、女学校さもなんさもやりでえのだが、貧乏なばがりに、ろくに書物も買ってやれねえが……」

「ちゃんや！　ちゃん！……」

彼女は涙に光る眼を上げて、こう父親を呼んだが、父親のその温かい情に対して、自分の感情をどう表現していいか解らなかった。彼女は、もう、試験を受けずに、手不足な我が家のために一生懸命に働くと言いたかったのだ。

「俺は、汝（にし）を百姓にしたぐねえ。汝も難儀だげっと、そいつばり勉強してる人達と一緒に試験を受げるなん

て……まあ明日からは、山さ書物を持って来て勉強しろ。父が汝あ分まで伐っから……」

松三はこう言いながら、自分の美しかった若い妻が、菊枝の母親が、いかに惨めな半生を送ったかを、農村の女達がいかに虐げられるかを思った。

太陽はだいぶ西に傾いて、淡い陽脚を斜めに投げだしていた。緑の新芽は思い思いの希望を抱き、榾火はとっぷりと白い灰の中に埋もれていた。

――大正十五年（一九二六年）『文藝市場』四月号――

底本：「佐左木俊郎選集」英宝社
１９８４（昭和59）年４月14日初版
入力：大野晋
校正：しず
１９９９年10月18日公開
２００５年12月21日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。